

東京都における無声化母音の促音化に関する 社会言語学的研究 —「洗濯機」のセンタクキ／センタッキ、「活火山」の カツカザン／カッカザン—

尾崎 喜光[※]

A Sociolinguistic Study on Phonological Change from Devoiced Vowel to Devoiced Consonant Lengthening (Gemination) in Tokyo : Pronunciation of *Sentaku-ki* (Washing Machine) and *Katsu-kazan* (Active Volcano)

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

2020 年秋のことである。身体が丈夫な筆者としてはめずらしく頭痛を発症し、これに続き平衡感覚が突然悪くなってしまった。まっすぐに歩いているつもりが、左へ左へと徐々にそれてしまうのである。ただ事ではないと思い、所属大学の保健センターに相談し、大学の近くにある総合病院で検査してもらったところ、右脳の硬膜の下に血液がたまっていることがわかり、急遽入院して手術を受けることになった。

離れたところにいる家族に担当医から連絡してくれたようで、担当医よりも先に家族から連絡が届き、「(慢性) 硬膜下血腫」という病気であることがわかった。幸い怪我に近い病気であったため、一週間ほどの入院で退院できた。

病室のベッドに寝ながら自分の病名を小声で口に出してみたところ、「コーマッカケッシュ」であることに気づいた。しかし、正しい発音はもしかしたら「コーマクカケッシュ」ではないかと思い、主治医がベッドに來たときに病名を尋ねたところ、「コーマクカケッシュ」という発音で病名を教えてくれた。

筆者にとっては初めて聞く語であったが、このような語にも、複数の発音が現実に存在することに気づいた。

似たような現象は既存のさまざまな語にも見られる。

たとえば「洗濯機」の発音には「センタクキ」と「センタッキ」の両方が現実にある。「ク」か「ッ」かの違いであり、ちょうど「硬膜下血腫」と同じである。このほか「活火山」にも「カツッカザン」と「カツクカザン」の2つの発音がある。こちらは「ッ」か「ク」かの違いである。

キーワード：音声変化, 無作為抽出多人数調査, 録音調査

※ 本学文学部日本語日本文学科

「洗濯機」の構成要素である「洗濯」の単独での発音やカナ表記は「センタツ」ではなく「センタク」であることを考えると、「洗濯機」のもともとの発音は「センタクキ」であり、その後「ク」が「ッ」に促音化して「センタツキ」となったものと考えられる。促音化の原因は、「センタクキ」の「クキ」の部分が[kuki]という音連続であり、無声子音[k]に挟まれた[u]が無声化して[ku̥ki]となり、その弱化した[u̥]が完全に失われるとともに1拍分の長さは保持されて[kki]（最初の[k]は破裂のない1拍分の無音）となったことにあると考えられる。その結果、[sentaku̥ki]が[sentakki]となったのであろう。

「活火山」も同様に、「ツカ」の部分が[tɕuka]であり、発音しやすいよう「ツ」の子音の調音点が逆行同化して[ts]が[k]になり、その結果[katsɕukazaN]が[kakkazaN]となったものと考えられる。「調音点の逆行同化」という要素が加わる分、変化のプロセスは少し複雑になることを考えると、「活火山」を促音化させて発音する人の割合は、「洗濯機」のそれよりも少ないかもしれない。

このように、促音化をもたらす根本原因は「母音の無声化」にあり、人によってはこれがさらに「促音化」へと進むのだと考えられる。

では、現在両方の発音が行なわれている「洗濯機」と「活火山」は、共通語の基盤となっている東京都において、どのくらいの割合の人が促音あるいは非促音（無声化された母音を含む音）で発音しているのだろうか。

本稿では、2018年10月から半年間にわたり東京都在住者約1,000人を対象とした言語調査から、その現状と年齢差から推測される変化傾向等について見ていく。

2. 調査概要

本稿で分析対象とするデータは次の調査により得た。

- ・東京都での多人数調査（2018年10月～2019年3月実施、20歳～69歳の男女1,049人が回答）^{注1}

実査は競争入札により選定した調査会社に委託した。東京都内の地域別人口比に従って調査地点を無作為抽出し、さらに各調査地点から回答者を無作為抽出した。調査は、調査会社の調査員による個別面接法により行なった。なお、調査の詳細は尾崎喜光（2021）で説明している。

「洗濯機」「活火山」等の音声項目は、ICレコーダを用いて調査員に録音させた。録音は、回答者から承諾を得た後に行なった。

調査では、回答者の音声は調査員の質問と重ならないよう、質問の後に1～2秒間を置いてから、少し大き目の声で、「です」等は付けずにその言葉だけを言ってくれるよう調査員から指示してもらった。調査終了後の音声の聴き取りは筆者が行なった。

3. 調査結果

3.1. 「洗濯機」の発音

「洗濯機」を発音してもらうための質問文は次のとおりである。「乾燥機」と対比させる

ことで、「洗濯機」という回答がスムーズに得られるようにした。

質問文の末尾は「何ですか」とせず言いさしのような形にした。この方が、空欄補充のような形で回答がスムーズに得られると考えたためであり、実際にそうであった。

(4) 家電ですが、衣類を乾燥させる機械は「乾燥機」。では、衣類を洗う機械は…

結果は図1のとおりであった。回答者は1,049人であるが、録音が得られなかった回答者や、「洗濯機」という回答が得られなかった回答者等がいるため、有効回答者数はこれより少なくなりちょうど1,000人である。

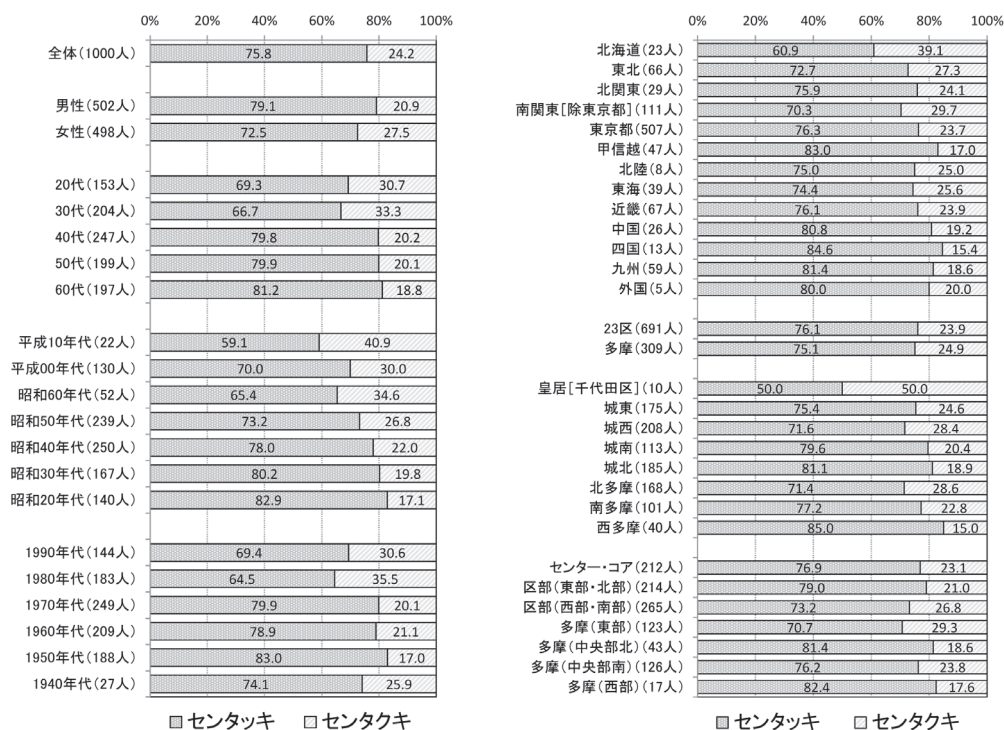


図1 「洗濯機」の発音（東京都）

左側グラフの最上部の「全体」によると、促音化した「セントッキ」が75.8%、促音化しない「セentakキ」が24.2%であり、東京都では促音化した「セントッキ」の方が全体として優勢であることがまずわかる。

回答者を男女別に見ると、男女とも「セントッキ」の方が優勢である。顕著な男女差は見られないが、「セントッキ」は女性よりも男性の方がやや優勢である。

その下は年齢層別分析である。どの年齢層でも「セントッキ」の方が優勢であるが、40代以上から30代以下にかけて数値が1割程度減少し、逆に「セentakキ」が1割程度増加する。相対的にはあるが、「セントッキ」は若年層よりも40代以上でやや優勢であるのに対し、「セentakキ」は上の年齢層よりも若年層でやや優勢である。

これと似た分析になるが、その下は和暦による回答者の生年層別分析である。なお「平

成 10 年代」は回答者が 22 人にとどまるため数値の安定性は低く、留意が必要である。これによると、やはりどの生年層においても「センタッキ」の方が優勢であるが、「センタッキ」は早く生まれた世代ほど（＝調査当時の年齢が高い者ほど）優勢であるのに対し、「センタクキ」は現在に近く生まれた世代ほど（＝調査当時の年齢が低い者ほど）優勢であるという違いがゆるやかに見られる。

その下は西暦による回答者の生年層別分析である。「1940 年代」は回答者が 27 人にとどまるため留意が必要である。これによると、やはりどの生年層でも「センタッキ」の方が優勢であるが、1970 年代以前の生まれから 1980 年代以降の生まれにかけて「センタッキ」の数値が 1 割程度減少する一方、「センタクキ」は 1 割程度増加する。相対的にはあるが、「センタッキ」は 1970 年代以前の生まれでやや優勢であるのに対し、「センタクキ」は 1980 年代以降の生まれでやや優勢である。先に見た年齢層による違いとやはり相関している。

右側上のグラフは、回答者を出身地別（地域ブロック別）に分析したものである（「九州」には沖縄県を含む）。どの地域出身であっても「センタッキ」が優勢であり、顕著な違いは見られない。北海道出身者の「センタッキ」の数値は他よりもやや低いが、回答者が 23 人にとどまるため留意する必要がある。

その下のグラフは、都内の在住地による地域差の有無を確認するため、都内を 3 つのパタンにより地域区分して分析したものである。

東京都を大きく「23 区」とそれ以外の「多摩」に分けて分析したところ、これらの間での地域差はほぼ見られない。

グラフのその下の地域区分は、区部(23 区)を一般的な区分に従いさらに 4 地域に区分し、あわせて多摩地区も 3 地域に区分して分析したものである。^{注2} 回答者数が極端に少なく数値が安定していない「皇居」（＝千代田区）を除けば、ここでも都内の地域差はほぼ見られない。

グラフのさらに下の地域区分は、東京都生活文化局編（2021）の地域区分によるものである。^{注3} 回答者が少ない「多摩（西部）」を除き、やはり地域差はほぼ見られない。

結局、回答者の年齢層およびそれと相関する生年層を除けば、性別・出身地・居住地による違いは認められないと言ってよい状況である。

3.2. 「活火山」の発音

「活火山」を発音してもらうための質問文は次のとおりである。「休火山」と対比させることで、「活火山」という回答がスムーズに得られるようにした。

（８）火山の種類ですが、「休火山」に対して、今でも噴火している火山は…

結果は図 2 のとおりであった。先に見た「洗濯機」よりも無回答（「わからない」という旨の回答）が多かったため、有効回答者数は 965 人である。

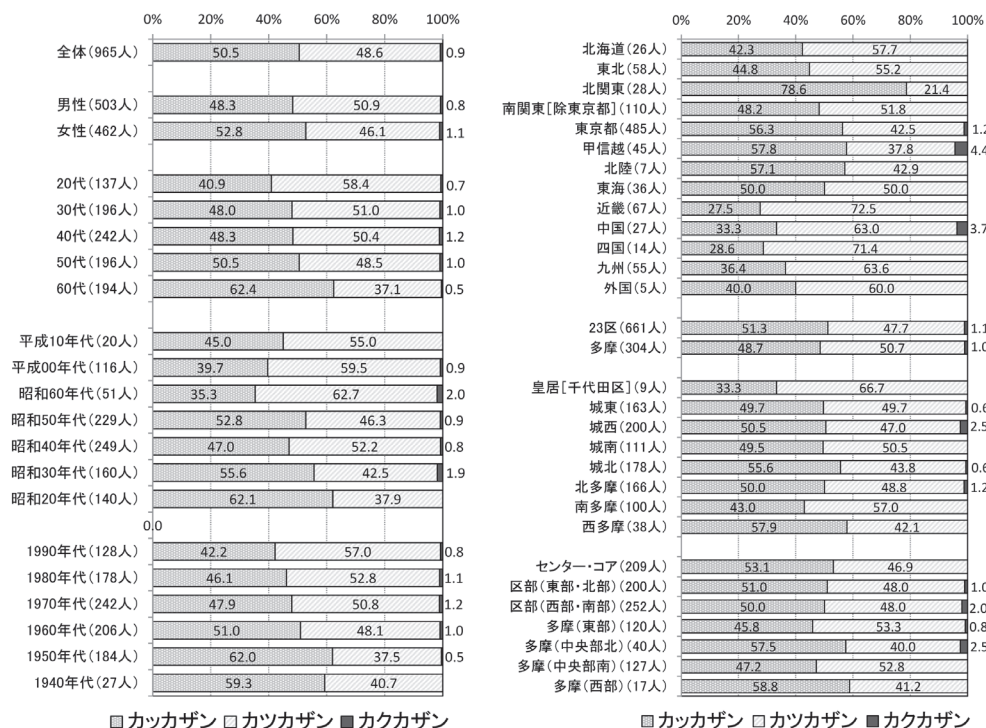


図2 「活火山」の発音（東京都）

左側グラフの最上部の「全体」によると、促音化した「カッカザン」が50.5%、促音化しない「カツカザン」が48.6%であり、両方の発音が拮抗していることがわかる。東京都では現在、両方の発音を対等に認めてよい状況である。なお、先に見た「洗濯機」で促音化した発音が75.8%であったことと比較すると、「活火山」の促音化の数値は低い。「活火山」には「調音点の逆行同化」([ts] → [k])という変化要素が必要となり、その必要のない「洗濯機」([k] → [k])と比べると語形の変化も相対的に大きくなることが、促音化を阻む要因の一つとなっているのではないかと考えられる。

なお、数値は0.9%と極めて小さいが、「カクカザン」が見られる点は注目される。「カッカザン」は「カツカザン」から変化した語形であるが、「カッカザン」の「ッ」の調音点を元の[ts]に戻さず[k]のままにして非促音で発音すると「カクカザン」となる。仮に「核火山」という語があり（隣接する火山群のうち中核的な火山という意味）、これを促音化して発音すると「カッカザン」となる。「カクカザン」は、戻す形を誤った発音と考えられる。

回答者を男女別に見ると、男女とも「カッカザン」と「カツカザン」が拮抗しており顕著な男女差は見られないが、先に見た「洗濯機」と異なり、促音を含む「カッカザン」は男性よりも女性でやや優勢である。

年齢層別に見ると、どの年齢層にも顕著な片寄りはなく拮抗する傾向が見られるが、60代では「カッカザン」が、20代では逆に「カツカザン」が優勢となり、その間の年齢層ではその中間となっている。その結果、ゆるやかな傾向ではあるが、上の年齢層から下の

年齢層に向けて「カッカザン」が減少し「カツカザン」が増加する。逆方向で見れば、下の年齢層から上の年齢層に向けて「カッカザン」が増加し、逆に「カツカザン」が減少する。その下の和暦による回答者の生年層別分析によると、やはりどの生年層にも顕著な片寄りはなく両者は拮抗しているが、「カッカザン」は早く生まれた世代ほど（＝調査当時の年齢が高い者ほど）やや優勢であるのに対し、「カツカザン」は現在に近く生まれた世代ほど（＝調査当時の年齢が低い者ほど）優勢であるという違いがゆるやかに見られる。

その下の西暦による回答者の生年層別分析でも、どの生年層にも顕著な片寄りはなく両者は拮抗しているが、和暦による分析と同様の傾向がゆるやかに見られる。

回答者を出身地別（地域ブロック別）に分析した右側上のグラフによると、「東海」以東の東日本出身者と「近畿」以西の西日本出身者との間に違いが見られる。東日本出身者は「カッカザン」と「カツカザン」が拮抗ないしは「カッカザン」がやや優勢であるのに対し、西日本出身者はむしろ「カツカザン」の方が優勢である。ワ行（ア行）五段活用動詞の連用形（過去形等）は、西日本では「笑う」が「笑（わろ）うた」とウ音便になるのに対し、東日本では「笑った」と促音便になる。もし出身地の発音傾向が今回の調査に反映されているとすれば、「活火山」における＜調音点に関する逆行同化＞という発音上の“ハードル”のある状況においては、東日本の促音優位性が出身地の東西差として表われている可能性が考えられる。^{注4}

その下の都内の地域区分によると、「23区」と「多摩」の間に地域差はほぼ見られない。他の地域区分によっても、該当人数が少ない地域を除く地域間には顕著な違いは見られない。

東京都において「カッカザン」と「カツカザン」は全体的に拮抗しているが、回答者の年齢層およびそれと相関する生年層、また回答者の出身地による傾向的な違いが見られる。

4. 考察

本稿で分析対象とする「洗濯機」「活火山」のような語の促音化／非促音化について、これまでにどのような知見が得られているかを整理し、本調査の結果を考察する。

4.1.『NHK 日本語発音アクセント新辞典』での発音表記

「洗濯機」と「活火山」の発音について、国民の言語使用というよりも放送における発音やアクセントの規範や望ましさを単語ごとに示した『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（NHK 放送文化研究所編 2016; NHK 出版）でどのように示されているかを見てみよう。

(1)「洗濯機」の発音

「洗濯機」については「センタクキ」（クの母音は無声化）という発音のみが示されている。一方「活火山」には、「カツカザン」（ツの母音は無声化）と「カッカザン」の両方の発音が示されている。これらはNHKの放送用語委員会での審議を受けて決められたようである。

放送用語委員会では、語形にゆれのある語等について、各種調査データを参照しつつ放送用語として適切だと事務局から提案された語形について審議し決定している。平成 30

年（2018年）10月開催の委員会では語形の促音化についても審議され、塩田雄大（2019）には審議の結果および委員会で参照した調査データが示されている。本稿で論じる「洗濯機」「活火山」についても取り上げている。

このうち「洗濯機」については、放送用語としては「〔センタクキ〕を第一推奨形とし、〔センタッキ〕を第二推奨形として加える。」と決定している。根拠の一つとして2013年8月実施のウェブアンケート（846人回答）の結果が示されているが、回答者自身の発音（漢字表記の読み）に関する意識については、「センタクキ」と「センタッキ」がおおよそ半数ずつであり拮抗している。なお、過去に実施された有識者等に対するアンケートでは全体的に「センタッキ」が優勢である一方、戦前から平成までの国語辞典・英和辞典での扱いでは、いずれの時期でも「センタクキ」の方がむしろ優勢であることを示している。

東京都在住者を対象とした本調査では、「センタクキ」よりも「センタッキ」の方が優勢であった。もし全国の傾向もこれと同様であるとすれば、放送においても今後は「センタッキ」を主たる語形とすることも考えられそうである。ただし、20～30代では「センタクキ」がむしろ増加しており、これが言語変化の反映だと考えられるならば、現在主流となっている「センタッキ」から「センタクキ」へと回帰していることも考えられる。これが事実であるならば、「洗濯機」という語を分析的にとらえずいわば丸呑みにするような形で自分の語彙に取り入れることが多かった状況から、「洗濯機」を「洗濯+機」と分析的に認識して取り入れる傾向が近年広まってきたことに起因する可能性が考えられる。

（2）「活火山」の発音

一方「活火山」については、放送用語としては「現行のまま〔カツカザン〕〔カッカザン〕を同等の推奨形としておく。」ことを確認している。根拠の一つとして、2014年7月実施のウェブアンケート（921人回答）による正誤意識の結果が示されている。正しいとする読み（発音）の数値は、「カツカザン」42%、「カッカザン」15%である。また、「どちらも正しいが「カツカザン」が本来の読み方である」31%、「どちらも正しいが「カッカザン」が本来の読み方である」12%である。正誤や本来性に関する意識としては「カツカザン」の方が優勢であることがわかる。一方、過去に実施された有識者等に対するアンケートや、戦前から平成までの国語辞典・英和辞典での扱いでは、「カッカザン」の方が優勢であることを示している。こうした状況を総合的に判断し、現行のまま両者を同等の推奨形としたのではないかと推測される。本調査によると、東京都では「カッカザン」と「カツカザン」が拮抗しており、結果的にこれらを同等の推奨形とすることの根拠となっている。両方を推奨形とすることは、東京都での発音の実態とも合致する。

「活火山」の発音については、山下洋子（2016）にも、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』編集担当者の考え方等が紹介されている。

編集作業中に用語班で議論になった語のうち、「キ」「ク」「チ」「ツ」にカ行音が続く漢語において、これらの母音が無声化する場合と拍全体が促音化する場合とがあるさまざまな語を取り上げ、放送用語としての班の考え方を放送用語委員会で報告するとともに、用語委員の意見を紹介している。

「活火山」については、いずれで発音しているか「判断がつきにくい語」（両方の発音がある語）の一つとして示されており、放送用語としてどちらの発音をとるのかを班内で検

討したとする。NHK 放送文化研究所が過去に編集・発行した『アクセント辞典』（『NHK 日本語発音アクセント新辞典』以前のものは5版ある）の立項の変遷をまとめた一覧表によると、「活火山」は、昭和18年版・昭和26年版では「カッカザン」のみであるが、昭和41年版以降は「カッカザン」に加え「カツカザン」も立項され、ゆれがあることが示されている。『NHK 日本語発音アクセント新辞典』ではこれを踏襲し、両方を立項したとする。当初の「カッカザン」に「カツカザン」が追加されるという辞書における変遷は、本調査に現われた年齢差が、「カッカザン」から「カツカザン」への回帰としての変化を反映していると考えられるならば、それと軌を一にする。

いずれで発音されるかの要因のひとつとして、語構成となじみ度を指摘している。「活火山」については、明示的な言及まではなされていないが、「活+火山」という語構成になる。「休火山」や「死火山」との対比から「活+火山」という語構成が意識されれば「カツカザン」という発音が、そうした語構成があまり意識されず一語のように意識されれば「カッカザン」という発音になりやすいと考えられるとする。本稿で先に述べた「分析意識」も、これとほぼ重なる考え方である。^{注5}

4.2.『言葉に関する問答集 総集編』での考え方

促音化させて発音するか否かに「分析意識」が関係することに関連する説明は、文化庁の『言葉に関する問答集 総集編』（文化庁編 1995;大蔵省印刷局[現・国立印刷局]）の「旅客機」の発音に関する解説にも見られる。

「旅客機」の発音に「リョカクキ」と「リョカッキ」があること、およびそれに伴って生ずるカナ表記のゆれと適切性等について解説しているが、これに関連し、語の各構成要素が結合して一語を形づく際の発音についても解説している。筆者の表記に置き換えて説明すると、音連続が／k {i/u} +kV／となる場合（「V」は母音、「+」は構成要素の境界）、{i/u} は無声化するか脱落（＝促音化）するのが原則であるとした上で、「学校」のように社会の各方面・各分野で誰もがごく普通に使う語であればあるほど前後の結合が緊密になり「ガッコウ」のように促音で発音されるのに対し、「液化」のように比較的新しく使われるようになった言葉でその使用分野も狭い語は前後の結合が相対的に緊密でなく完全に促音化するまでには至らず「エキカ」（「キ」の母音は無声化）と発音される旨のことを解説している。問題の「旅客機」については、語の構成要素の第二次結合（「{旅+客}+機」と分析し、「旅客」と「機」の結合）の箇所（＝「客」のクの部分）は無声化の段階にとどまっていると見るができるが、実際の発音では促音化と無声化でゆれている旨のことが述べられている（「悪感情」「逆効果」「三角形」なども同様）。「旅客機」の「旅客」と「機」が緊密に結びついてはや全体で一語という意識を持っている人とそうでない人とがそれぞれ一定の割合いるため、両方の発音が行なわれているということなのであろう。

本稿で論じる「洗濯機」も、「{洗+濯}+機」と分析できる語であり、形態素境界も「旅客機」と同様の「ク+キ」という音連続であることから、第二次結合の箇所「ク」は、促音化と無声化でゆれることが予想されるケースであり、実際にそうであった。

一方「活火山」は、／ts {u} +kV／という音連続となり、第二次結合の箇所の子音は[k]ではなく[ts]であるものの「活+{火+山}」と分析でき、やはり促音化と無声化でゆれることが考えられ、実際にそうであった。

構成要素間の結合の緊密性という点から言えば、「センタッキ」「カッカザン」と促音化して発音する者にとっては、第二次結合の「洗濯＋機」「活＋火山」という分析意識が希薄で、日常の言語使用では全体として一語という意識が強いためである可能性が考えられる。

4.3. 「枝分かれ制約」の検証

三宅知宏（2004）は、三字漢語の連濁や複合語アクセント規則において見られる、語構成上の「枝分かれ制約」が、半濁音化や促音化についても該当するか否かについて考察している。ここでいう（三字漢語の）促音化とは、後部要素の最初の音がカ行音／サ行音／タ行音／パ行音のいずれかの場合に、前部要素の末尾（すなわち直前の拍）のキ・ク・チ・ツのいずれかが促音に変化する現象のことである。

(1) 左枝分かれ構造

考察の結果、左枝分かれ構造の場合は基本的に促音化が起こらない（＝促音化規則を阻止する）とする。分かりやすさのため、漢字一字を丸記号により、また考察対象となる漢字を特に「●」により、そして構成要素のまとまりを「 」で括って示すと、「○● ○」という構造が左枝分かれ構造であり、こうした構造を持つ場合は、「●」がキ・ク・チ・ツであっても促音化しないということである。「動物的」「独立国」等の「ツ」、「創作家」「愛国会」等の「ク」が例示されている。

例示された複合語のうち、前部要素の末尾がクであり後部要素の最初がカ行音である「創作家」「愛国会」など音連続が「-ku・k-」となるものは、丁寧な発音では確かに「ku」であり促音化しないが、日常的な発音では促音化した「ソーサッカ」「アイコッカイ」もありそうである。これと同じ左枝分かれ構造を持ちかつこれと同じ「-ku・k-」という音連続を持つ「洗濯機」は、筆者の調査によれば、「センタクキ」の他に「センタッキ」も実際に行われている。

同様の現象は、発音について規範性の高いアナウンサーの音声にも見られる。

白田弘（1979）は、テレビやラジオのニュース番組で、日本の元首相「田中角栄」を「タナッカクエー」と促音化して発音することがあり、放送ニュースにおいて音声伝達上重要な問題になりうることから、アナウンサーが原稿を読むときの促音化の実態を調査し考察している。

1976年11月から半年間に放送されたNHKの正午のテレビニュースから抽出した20回分において、ニュースを読んだ25人のアナウンサーの発音を対象に、「学校」「取って」のような共通語で促音が定着しているもの以外で促音化した52回を分析したところ、促音化するか否かはアナウンサーにより個人差があるとする。論文中に示された分類表を見ると、左枝分かれ構造に該当する「音楽会」のような2次結合部（＝「{音＋楽}＋会」の「ク」の部分）や、2次以上の結合部で「[ク]＋カ行音」という音環境であるときに、促音化するケースが多いことが確認される。アナウンサーによっては、こうした発音を行っている者も実際にはいる。

(2) 右枝分かれ構造

これに対し右枝分かれ構造の場合、すなわち「●○○」という構造を持つ場合は、

三宅知宏(2004)によると、基本的に促音化が起こる(＝促音化規則を阻止しない)とする。「実社会」「活火山」等の「ツ」,「赤血球」の「キ」,「白血球」の「ク」が例示されている。本稿で論じている「活火山」も例示されているが、これは「カツカザン」ではなく「カッカザン」と発音されるということである。しかしながら、例示されている複合語のうち「別天地」「別世界」などは、筆者には「ベッ」ではなく「ベツ」という発音もあるように感じられる。「活火山」も、筆者の調査によれば、「カッ」の他に「カツ」も実際に行われている。

「枝分かれ制約」は、促音化／非促音化についても確かに多くの複合語に該当するが、該当しないケースも実際には存在し、その典型例が「洗濯機」の「センタッキ」,「活火山」の「カッカザン」である。「枝分かれ制約」に加え、日常の言語使用における「分析意識」という要素等も加味する必要があるようである。

4.4. 二字漢語における促音化規則の三字漢語への拡大

高山知明(2002)は、漢語の促音化について二形態素(＝漢字二字)の間の音的条件を整理して示す中で、現代語においては、前部の漢字の末尾がツである場合は、後続の無声子音の違いに左右されず促音化を起こすのに対し、前部の漢字の末尾がクである場合は、カ行子音が続くときは促音化しうが、タ行・サ行・ハ行子音では例外を除き促音化しない旨ことを、よく知られたこととして紹介している。

那須昭夫(1996)も、二字漢語での促音化について、最初の漢字の二拍目の子音が／t／である場合と／k／である場合とで異なること、すなわち／t／である場合は直後の子音が無声子音であれば促音化が生じるのに対し、／k／の場合は、直後の子音も／k／でないと促音化が生じない旨のことを、知られていることとして言及している。

本稿で論じるのは二字漢語ではなく三字漢語の「洗濯機」「活火山」であるため事情は少し異なるが、「活火山」に「カッカザン」という発音も実際にあるということは、「活」の「ツ」の直後が、子音の調音点が異なる「カ」であっても促音化するという二字漢語の規則があてはまる場合があることになる。

一方、「洗濯機」には「センタッキ」という発音もあり、むしろこの発音の方が優勢であるということは、「濯」の「ク」の直後が、子音の調音点が同じ[k]である「キ」であるからこそ促音化するという二字漢語の規則が、三字漢語にもあてはまることを示しているように思われる。これと逆に、「濯」の「ク」の直後がサ行音となる「洗濯槽」は「センタッソー」とならないのも、二字漢語における促音化規則が三字漢語にも及んでいる場合があることを示していると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

2018-19年に東京都在住者約1,000人を対象に実施した音声調査によると、「洗濯機」を「センタッキ」と促音化して発音した人は75.8%であり、促音化しない「センタクキ」よりも優勢であることがわかった。また、「活火山」を「カッカザン」と促音化して発音した人は50.5%であり、促音化しない「カツカザン」の48.6%と拮抗していることがわかった。

「センタッキ」についても「カッカザン」についても、回答者の性別や都内の居住地による顕著な違いは特にないといってよい状況である。

これに対し、回答者の年齢層およびそれと連動する回答者の生年層による一貫した違いがゆるやかに認められた。「センタッキ」も「カッカザン」も若年層ないしは現在に近い生年層に向けてゆるやかな減少傾向を示すのに対し、促音化のない「センタクキ」「カツカザン」は逆にゆるやかな増加傾向を示す。この違いがもし言語変化の反映と考えることができるならば、促音化した発音から促音化しない発音へと現在ゆるやかに変化（おそらく回帰としての変化）しつつあるということになる。「洗濯機」「活火山」を語の分析意識なく自分の語彙に加えると「センタッキ」「カッカザン」という発音になる可能性が低い。音声学的に考えると、まずは「センタクキ」「カツカザン」という発音があり、これが促音化して「センタッキ」「カッカザン」になったことが想定されるが、こうした語が日本人の言語生活で日常的に使われ始めた頃から、語の分析意識を伴うことなく使っていた人が少なくなかったのかもしれない、こうした語が使われるようになった初期の頃から、現実には「センタッキ」「カッカザン」が多かったのかもしれない。

しかしその後、「洗濯機」に対する「乾燥機」、「活火山」に対する「休火山」や「死火山」といった、語の構成要素の一部を共通に持つ同一領域内での関連語も日常的に使われるようになるに従い、これらの語の語形面での体系性ないしは語の分析意識を持つ者が増加し、「洗濯機」を「洗濯+機」、「活火山」を「活+火山」ととらえ、その結果、促音化しない「センタクキ」「カツカザン」が増加したということが可能性として考えられる。

回答者を出身地別（地域ブロック別）に分析したところ、「洗濯機」には顕著な地域差は見られないが、「活火山」にはそれが傾向的に見られ、西日本出身者には促音化した「カッカザン」は相対的に少ないのに対し、東日本出身者には促音化した「カッカザン」が相対的に優勢であった。ワ行（ア行）五段活用動詞の連用形（過去形等）には、東日本の促音優位性が見られるが、本稿で論じる促音化の有無にも、「カッカザン」のようなく調音点に関する逆行同化＜という“ハードル”を伴う発音においては、そうした東西差がもしあるとすれば、その違いが出身地の東西差として現われている可能性が考えられる。なお、「センタッキ」に東西差が見られないのは、この語ではく調音点に関する逆行同化＞が生じないため、東西差が顕在化しなかったのかもしれない。いずれにせよ、日本全域を対象としたこれらの発音に関する調査の実施が望まれる。

「洗濯機」や「活火山」を促音化して発音するか否かについては、洗濯機および関連する家電の普及と「洗濯機」の発音との関係、活火山やそれと関連する自然現象が日本で話題になった度合いと「活火山」の発音との関係など、言語使用の土台となる日本の社会文化的背景との関連も研究する必要があるだろう。たとえば、過去半世紀ほどの日本語が音声として残っているテレビ番組・ラジオ番組等のアーカイブを言語資料として分析すれば、ある程度のことかわかる可能性がある。今後の課題としたい。

注

- 1 JSPS 科研費 JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）の一環として実施した。

- 2 各地域には次の市区町を含む。実際に調査対象となった市区町のみを記す。なお、城東・城西・城南・城北に含める区の種類についてはこれ以外のものもある。

皇 居：千代田区

城 東：中央区、台東区、墨田区、江東区、葛飾区、江戸川区

城 西：新宿区、世田谷区、渋谷区、中野区、杉並区、練馬区

城 南：港区、品川区、目黒区、大田区

城 北：文京区、豊島区、北区、荒川区、板橋区、足立区

北多摩：立川市、武蔵野市、三鷹市、府中市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、国立市、狛江市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市、西東京市

南多摩：八王子市、町田市、日野市、多摩市

西多摩：青梅市、羽村市、瑞穂町

- 3 各地域には次の市区町を含む。実際に調査対象となった市区町のみを記す。

センター・コア：千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区、渋谷区、豊島区、荒川区

区部（東部・北部）：北区、板橋区、足立区、葛飾区、江戸川区

区部（西部・南部）：品川区、目黒区、大田区、世田谷区、中野区、杉並区、練馬区

多摩（東部）：武蔵野市、三鷹市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、狛江市、清瀬市、東久留米市、西東京市

多摩（中央部北）：立川市、武蔵村山市、羽村市、瑞穂町

多摩（中央部南）：八王子市、府中市、町田市、日野市、国立市、多摩市

多摩（西部）：青梅市

- 4 促音化した「カッカザン」が相対的に優勢ではないかと推測される東日本の内部においても地域差があるかもしれない。筆者が生まれ育った長野県には「信濃の国」という県歌がある。現在は分からないが筆者が子供の頃は、この歌を小学校で全員習って覚えた。多くの場合二番まで歌うが、二番の歌い出しは「^{よも}四方に聳ゆる山々は／^{そび}御岳乗鞍^{おんたけ}駒ヶ岳／^{こと}浅間は殊に活火山」であり、このときの「活火山」は「カッカザン」である。長野県公式ホームページにはひらがなによる歌詞付きの楽譜も掲載されているが、そこにも「かっかざん」と書かれている（ちなみに「かっか」のメロディは「ソドミ」と上昇するため、「っ」の箇所は喉を絞めるようにして歌うことになる）。このように長野県民は、県歌を通して小学校の頃にほぼ全員「活火山」を「カッカザン」と覚えるため、長野県出身者は「カッカザン」が多いことが推測される。図2によると、「甲信越」出身者は「カッカザン」が57.8%であるが、このうち長野県出身者を抽出すると「カッカザン」は75.0%（16人中12人）であり、確かに「カッカザン」の割合が高い。

- 5 三字漢語ではなく二字漢語であるが、たとえば「熱戦」を「白熱した激しい試合」という通常の意味で発音すると「ネッセン」になるが、仮にこれを「熱湯などの熱を用いた戦い」という意味で発音すると「ネツセン」となりそうである。日常的に使われる「熱戦」は、分析意識や語構成意識をほとんど伴わずに発音されるため促音化するのに対し、語形と漢字表記は同じでも新語として用いられた後者の場合は、分析意識や語構成意識を伴うため促音化にまで至らないのだと考えられる。

参考文献

- 臼田弘 (1979) 「「タナツカクエー」と「タナカクエー」～放送ニュースの促音化傾向～」『文研月報』29-2
- 尾崎喜光 (2021) 「東京都における母親の呼称の時代変化と加齢変化」『清心語文』23
- 塩田雄大 (2019) 「第 1428 回放送用語委員会 (東京) 用語の決定 および報告－「水族館」「洗濯機」「進学校」「デミグラスソース・ドミグラスソース」ほか－」『放送研究と調査』69-1
- 高山知明 (2002) 「日本漢語の史的音韻論的課題」『音声研究』6-1
- 東京都生活文化局編 (2021) 『世論調査結果報告書 令和 2 年 9 月調査 都民生活に関する世論調査』(非売品)
- 那須昭夫 (1996) 「二字漢語における促音化現象－最適性理論による分析」『音声学会会報』213
- 文化庁編 (1995) 「「旅客機」は「リョカッキ」か「リョカクキ」か」『言葉に関する問答集 総集編』(大蔵省印刷局 [現・国立印刷局])
- 三宅知宏 (2004) 「「半濁音化」「促音化」と「枝分かれ制約」－形態論と音韻論の接点 (3) －」『国文鶴見』38
- 山下洋子 (2016) 「放送用語委員会 (東京) 第 1405 回放送用語委員会－『アクセント新辞典』掲載の促音化した語形について (和語・漢語) －」『放送研究と調査』66-12
- NHK 放送文化研究所 (2016) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(NHK 出版)